

高尾山 歴史の散歩道 47

明治大学博物館 外山 徹

別当薬王院

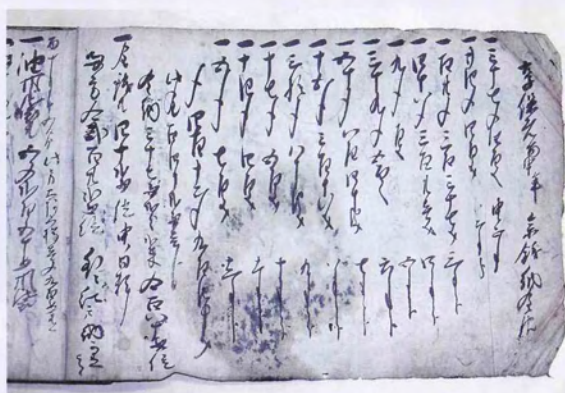
その3

江戸期においては、現在の大本坊にあたる寺域が薬王院有喜寺であり、その住職は高尾山内に散在する諸堂宇の別当職として一山を差配していた。住職以下、隠居・弟子僧、江戸後期には寺侍が寺務を取り仕切り、下男が用務に従事していたことを見てきたが、薬王院の台所事情ということ、追加のトピックスを拾ってみよう。

薬王院の台所事情

薬王院の歳出にかかる内訳としては堂宇の営繕費用が大きかったと考えられるが、大規模な修築は大檀那の出現を待つ必要もあつただろう。薬王院の恒常的な収益として往時は散り物と呼ばれた

か。薬王院の寺領朱印地七五石の大半が森林であったと推定される。風倒木などが発生するだろうから、修繕の用材に充てられるか、あるいは売却益があつたかもしれない。田畑は延宝三年（一六七五）付で高五石二斗六升七合五勺の記録がある。関東圏における地域市場の成熟を見る以前においては、ある程度自給自足の態勢が必要であつたと考えられる。この田畑の石高記載は、代官支配地内の所持地から年貢を



享保元年(1716)の月別参銭額一覧

納入するにあたってメモされたものと推定される。米についての収量から、年貢分を半分差し引くとして二石四斗六升八合余は一升瓶でおよそ二四七分弱となる。果して自給に足りる量であつたか否か？

自給自足の体制

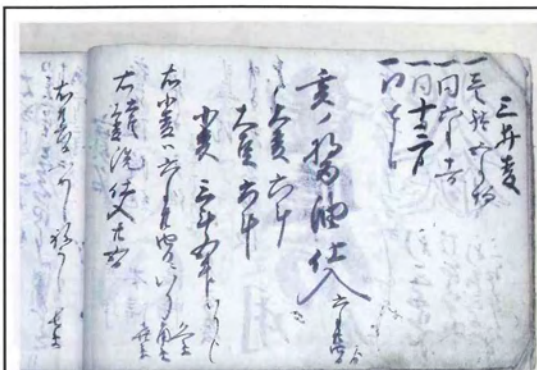
実際、自給の様子が書かれた記録も残る。江戸中期に作成された「年々諸用記」という簿冊の中には、

戊（享保三年）の九月十六日よりねかし十月八日にかへ
 一、醤油糍仕込ねかし
 大豆六斗
 大麦六斗
 小麦三斗五升煎る
 右で上がりそうろう
 て一石四斗四升あり
 という記述がある。大麦を用いているのが珍しい

が、当時、薬王院では醤油を自製していたことが分かる。一升瓶でざっと一四四分である。現在、調理場では一年間に何本使用されているのだろうか？

また、味噌の製造に関する記事もある。「中味噌」「上味噌」「極上本味噌」という等級があり、中味噌は大麦に塩が多め、上味噌は麦糍が原料、極上には麦ではなく大豆が使用されている。極上は「この塩かげんにては甘く有るべくござさうろう間、（塩を）重ねて入れしかるべく」というように、味わいにもこだわった製法となっていたことがわかる。用途によって使い分けられたのだろうか。味噌は一石ないし五斗の原料を用いた仕込みの記録が年に数回ある。

さらに、胡麻油についても記事があり、基本的な調味料は自製し、周辺で採取された穀類・野菜類を調理していたようだ。その後、一八世紀の後



醤油自製の記事(本文とは別の記事)

半から一九世紀にかけて、八王子周辺における地域経済の発展は著しいものがあった。弘化二年（一八四五）の会計簿からは、享保の頃自製していた醤油、味噌、胡麻油が購入によって賄われていたことがわかる。自製を全く止めてしまったとまでは断言できないが、わざわざ自製する必要のない経済環境になっていったと言えるだろう。

寺領百姓と葬祭檀家

前回の人員体制の続きとして、寺務の遂行に関

わる要員という意味では、人別上薬王院に付属していた以外の人々について少し触れておこう。

薬王院の寺領にはそこに起居する農民たちがいた。少ないながらも薬王院にとつては領民である。延宝九年（一六八一）の宗旨吟味帳には「門前之者」として、一名が記されている。当時の農民は本年貢・小物成（雑税）のほかにも労働力の提供である夫役負担が課されていた。それらは多分に名目として金納化も進んでいたのだが、薬王院の

寺領農民には他所とは違う勤めがあつた。

その主なものは、寺領の山林見回り役であり、盗伐の取締りに任じていた。それ以外に、堂宇の屋根吹き替え、清掃や除雪といった参道の保守、普請人足といった汚れ仕事ばかりではなく、山主の供

上柵田村からの助人足 元来、高尾山は麓の上柵田村三組（案内・川原宿・原宿）と上長房村をはじめとする、周辺諸村の総鎮守的な性格があつた。近隣の村々は共同で疫病除や雨乞などの護摩供を高尾山で執行していた。旧家の日記には正月には年頭挨拶に訪れ、折々祈祷を依頼するという関係が見える。この家では、居開帳などの祭儀の際には登山して宮番などを勤めていた。

こうした関係は一部の篤志の人々との間で結ばれたばかりではなかったようだ。享保一年には同村にある末寺の日光寺において村人が集められ、飯繩権現社建立計画が披露され、酒食の振舞いがなされている。これは単なる計画の披露と祝儀ではなく、労力の提供を依頼した趣旨と考えられる。

後年のことになるが、薬王院文書の中には、「助人足登山帳」という寛政一年（一七九九）三月

から文化三年（一八〇六）二月までの約七年間、上柵田村から延べ一五八名が登山した記録がある。寛政一〇年の旧本堂建立を皮切りに山内の再整備をすべく、それまでに傷んだ堂宇群の集中的な修築がおこなわれたようだ。実際、飯繩権現社の拝殿・幣殿の再建修理の棟札に文化元年・二年の年次がある。この帳簿の末尾には「本社ならびに末社など普請につき」という理由が述べられており、こうした助人足はそれ以前にも行われていたと記されている。

交通の利便性のよい平地とも違い、高地に伽藍を維持してゆくためには、少なからぬ財源と人的資源が必要であつたと考えられるが、薬王院の運営はかくも多くの人々の関与によって成り立っていたのである。

おことわり 史料の引用については、読みやすく原文に手を加え、適宜読み仮名を付しています。